

動一般について動物のレベルを含めて詳細に考察し、第Ⅳ部（人間における愛着行動の個体発生）で、人間の新生児から原初的反応の観察と、愛着行動パターンの発達段階や経過についての精密な記述と考察を行なっている。

この本はただ、資料や文献の総覽といった性質のものではなく、著者の愛着行動に関する新理論提出のための試論であり、基礎づけの論述である。おひたましの資料や文献が縦横に駆使されているが、そこには適切な選択と批判がある。母子関係について今までオーソドックスな権威を持っていたフロイド等の精神分析理論や、学習理論が厳しく批判されいるし、ピアジェの自己中心性の概念や、スピッツの「八か月不安」、「見知らぬ人への不安」の見解などに対しても独自の立場から反論を行なっているのを見

る」とがである。それは正当な批判であり、Attachment という一つの事柄を究明するためには一事もゆるがせにできない著者の態度はまさに行動研究に取組む

科学者としての真髓であろう。

訳も流暢で、よく日本語になつていて

と思われるが、中に用語の扱い方が適正

でないようと思われる箇所が二、三ある

のが気になる。ことに動物行動の用語

で、同一の原語なのに、初めの箇所と後

の方とでは全く異なつて取扱われている

ところがあり、これは訳者の間で、全編

を通しての照合や統一をとる余裕がなか

つたためかとも考えられる。また、訳者は

動物行動に関してはあまり慣れていない

いためかとも思われる。全体の流れには殆ど影響がないのではあるが、私には少

々残念なことに思われるのである。

（浅見千鶴子）

をもすすめたい。

（山道慶子）

教育改革者の群像

中野光著
國土社

本書にとりあげられた八名の教育改革者たちは、いずれも大正期において精力的に活躍した人たちである。その中の一人に北原白秋がいるのは興味深い。また大正デモクラシーといわれる歴史潮流に支えられた改革運動を、主体的になった多くの教育改革者たちのイメージを、より具体的に想像できるように紹介している。それ故、大正期の教育史を血の通つた内容のあるものにしていく。同時に同著者の『大正自由教育の研究』の一読